

おけいこ対談

玉川奈々福 × 山村若静紀

「新しい自分」が あなたを待っている

浪曲と日本舞踊、それぞれの世界で活躍する玉川奈々福さんと山村若静紀さん。ともに、芸を教わる側でもあり、教える側でもあり、お稽古に対して並々ならぬ興味を抱いている。はたして、その魅力とは——？

舞の衝撃

——若静紀さんは日本舞踊・上方舞（山村流の師範、奈々福さんは浪曲師として活動されています。最初に、お二方がそれぞれの伝統芸能を始められたきっかけや経緯を教えてください。

若静紀 私が日本舞踊を始めたのは三歳で、「孫に日本舞踊をやらせたい」という祖父母の強い思いがベースにありました。祖父はとにかく祇園が大好きで、もともと子どもたちにお座敷の芸事を習わせたかったようです。ほとんど興味を示さなかったために、「孫にはぜひ」という思いがあったみたいです。

奈々福 夢を託されたんですね。

若静紀 はい。私も、他のお稽古事はやめてしまったんですけれど、踊りだけはなぜか好きで、花柳流の師匠のもとで習い続けていました。

その後、大学進学で大阪に来てから他の舞踊の方々と交流する機会があり、そこで初めて山村流の舞台を観たんですが、そのときの衝撃はいまでも忘れられません。上方舞も日本舞踊ではあるのですが、それまで

続けてきた踊りとはまったく違うものだったんです。

奈々福 踊りと舞は、どこが違うんですか？

若静紀 踊りは主に江戸の歌舞伎の舞踊部分を取り出したものになります。前提として大きな劇場が舞台になりますから、動きが大きく派手で、衣装も原色や鮮やかな色が多い。歌舞伎から生まれたものですから物語性があるのも特徴で、踊り手は物語の中の役柄を演じることが多いんですね。

一方の舞は、京都や大阪のお座敷で生まれて発展し、お座敷に集まる旦那衆の奥さんや娘さんのお稽古事としても広まりました。踊りには跳躍運動が入りますが、お座敷では埃が立てられませんから、動きが小さく、回る動き（旋回運動）が中心です。衣装も、お座敷の邪魔にならないような、穏やかな色合いのものが好まれます。ストーリーや役柄はないものも多いのですが、その分、心情を表現するのに長けていて、ひとりの名もない芸妓の、旦那さんが帰ってこない寂しさや、遊女が大好きな人に捨てられた辛さを表現する——そんな芸能です。

その心情も、外に向けて発散するのではなく、心の内に抑えて抑えて、それでもしわじわにじみ出てきて

しまうというかたちで表現するんです。そうした思いが芸に昇華されているところに魅力を感じて、「どうしても山村流の舞をやりたい！」と思ってしまう。その頃の山村流には、キラ星のように素晴らしい師匠方がたくさんいらっしゃったので、それも影響したと思います。

花柳流の師匠には子どもの頃から見ていただいていたので不義理をしようことになるけれど、「どうしても山村流に行きたいんです」とお願いして、なんとか山村流に入門することができました。それが、二十代半ばのことです。

一生できる習い事がしたくて

——奈々福さんは、どのようにして浪曲の道に？

奈々福 出版社をいくつか経たあとで筑摩書房という出版社に入社し、配属されたのが世界中の文学からテーマごとに作品を選んだアンソロジー集をつくる『ちくま文学の森』編集部だったんですが、そこでお仕事をご一緒するのが、鶴見俊輔、井上ひさし、池内紀、森毅、安野光雅といった泰斗ばかりだったんです。そ